3-6

白金の爪で留められた象牙のナイトを手渡された真紀は、
「いただく訳には参りません」と当惑顔で断った。
「全日本学生選手権で優勝した記念に作ったそうです。兄らしいでしょう。真紀さん携帯かしてください」
麻里子は真紀の気持ちもお構いなしに、携帯をバックから出させると、さっさとストラップを取り付けて返してよこし、「形見分け……ぴったんこカン・カン」と神妙ぶったそばから一転して、テレビの人気番組のタイトルを口走るので、兄妹のＤＮＡは争えないものだと解しながらも、相手のなすがままになる気にもなれずに、着信履歴を確認したりしていたが、結局は享受することで折れてしまった。
職業柄と言ってしまえばそれまでだが、誰かと歓談に興じていても、大概は程々の局面で落とし所を探ってしまう習性が真紀には備わっていた。それは昌幸にしても例外ではなかったのに、麻里子とは何かが違った。
例えば、先程のこんなやり取りの一端で、
「今日は泊まっていってください」
「いくらなんでも、それは無理よ。そのつもりで来てないし、分かるでしょ」
「ここで会ったが百年目?」
「小心な私に、そうおいでなさいましたか」
「流石に花見とはまいりませんが、月見にご招待いたします」
「酔いもいっぺんで醒めました。こうなったら持ちつ持たれつ、明日帰ることにします」
「よかった！こんなチャンスは百年に一度来るか来ないかですもの」
「私も、これが百年目と思い観念しました」
こんな調子で、互いの素養の抽斗から古典落語の演目『百年目』の一節コードを、すばやくピンポイントで掬い上げると、即興で対話を盛り上げたりする間合いだった。
同性同士の色合いから生まれる妖変かもしれない。
因みに、『百年目』は、二代目桂枝雀の師匠で上方落語の大御所、三代目桂米朝の得意ネタの一つである。

ならば、ビジネスホテルを紹介して欲しいと頼む真紀に、
「ゲスト・ルームへどうぞ?。……。元へ、ごめんなさい、私の部屋です」
麻里子は頑なに演じることが使命でもあるかのように、凛然と見得を切った。